

ヒアリング・ヴォイシズ、オープンダイアローグの 理論と実践から ――よりよいコミュニケーションのために新しい対話 を試みる

日本臨床心理学会は、支援する側がされる側の「障害」や「症状」にどのように向き合うか、自分自身の関わりや捉え方などの点検を大切にしてきました。「幻聴」を症状としてではなく、「声」として、それが展開する世界を理解しようとするヒアリングヴォイスの実践も、それに重なっています。

今回は、幻聴に限らず、精神障害全般に対して、これまでとは全くちがった考え方に従って、支援・援助活動を地道になされて来たオープンダイアローグを取り上げ、斎藤環さんを大会にお招きして、ヒアリングヴォイスとともに、それらについて学び、自らの実践を見直すということを、行いたいと思います。

オープンダイアローグ (Open Dialogue：開かれた対話) は、フィンランドの過疎地で地域全体が取り組んでいる精神医療の支援援助の方法から生まれたもので、考え方です。専門家がその知識と経験を駆使して、患者を助けようとするという発想から脱して、専門家に兜を脱がせ、よくわからないことを最大に大切に「オープンな対話」がなされることで、薬物使用は最小限にとどめ、再発率を劇的に下げるなど、世界的に注目を浴びるようになりました。日本では斎藤環さんのメディアを通じた積極的な発言などで、大きく注目されています。

オープンダイアローグの基軸には、**リフレクティグ・プロセス**があって全体が展開します。1987年頃、リフレクティングは、家族療法家であったノルウェーのトム・アンデルセンらの実践から生まれてきた方法です。この技法の背後には、近代の専門家支配というイデオロギーを超えんとする価値観や理念が含まれています。

ヒアリング・ヴォイシズ (Hearing Voices：以下略「HV」) は、1987年にオランダで始まった活動です。「幻聴」という言葉を恐れず、謙虚に調べてみると、いくつかの調査研究の結果、空耳が聞こえることは多くの人にあり、それらを「幻聴」精神疾患の症状としてラベリングしないで、それとうまく付き合っていくことが結局最善の道だとHVの活動を通してわかって来ました。最近では、「幻聴」だけでなく、「妄想」などの体験も共有することで、症状が軽減することがHVの活動を通してわかって来ました。

発言者： ＊オープンダイアローグの日本での取り組み：斎藤 環 氏

＊リフレクティグ・プロセスの試行実践：滝野 功久

＊ヒアリング・ヴォイシズの取り組みについて：藤本 豊

全体コーディネイト：滝野 功久